

---

# 平和の春

ブータローの相棒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平和の春

### 【Nコード】

N4136C

### 【作者名】

ブータローの相棒

### 【あらすじ】

平和にありそうな卒業式の時の春です。ずいぶん前に書いたので季節外れな分ご了承ください

今は、3月。暦上では春と呼ばれる時期。

3月そして卒業の時期。

どこの学校も最上級生は跡を残して巣立っていく卒業式という行事を必ず行う。

在校生にとっては、卒業生を見送る会。それとともに新しい学校の伝統を受け継ぐと誓いをたてる会でもある。

今はまだ春になったばかりの頃、木々の周りにはまだ枯れた状態の枝がちらほらと落ちている。

虚しく枝が周り一面に散乱する。春といえども桜の蕾さえも付いていない。

ピンク色の情景は目に浮かばない。

置き去りされたような桜が根全体を支持している。

茶色一色の残像が嫌にも視界に入る。

冬の時に感じた凜とした寒気が消える。そのかわりに暖かな風が人混みの間を透き通る。

——特殊な強弱のない清爽とした風が人々の隙間に吹きわたる。

空は青々として雲もあまり見かけない。水色に染まった空が人々の目にもしみ付く。

太陽からのしみるような広大な光が燦々と照らす。  
今日は快晴の景色だった。

通学路を歩く学生が四方八方で見かける。

同じ学ランを着用して屯いながらそれぞれ同じ方向へと向かう。仲の良い者どおしでじゃれあいながら通学する。

時折歩を速めて急いて通学する者もいる。

——それがいつもの学生の通学。

それは1日という短い時の（予定）スケジュールの一つ。  
特別決められたことではないが自然に日常生活の一つとして交えていた。

じゃれあう複数の学生の中にも挨拶がわりのようにボケとツツコミを交わす2人が紛れ込んでいた。

「なんや和葉お前今日も馬のしっぽでもくつつけているんかいな？」  
色黒少年は何気な関西弁で冗談を交える。

「馬のしっぽとちゃうわ。これはポニーテールやで…」

色黒少年に対して隣り歩く少女は、強い語調で言葉を漏らす。  
叫ぶように声を張り上げる。

「ほお…どっからどう見ても”馬のしっぽ”やで……」

その言葉に反応して眉を吊り上げる。

云いたい言葉を述べようと口元を尖らせる。

「ちゃうわ。――平次のせいであたしら周りに噂されとるやろ?」

普段の口調が関西弁だと思われる男女生徒が慣れた感じで軽くケ  
ンカをする。

卒業式らしく見た目はいつもよりかはよくした状態で。

通学の間2人の漫才が絶えず交わされていた。区切りを付けようにもネタに絶えることはなかった。

もちろん、本人たちはそのためのネタなど考えていない

何気ない日常でネタの”きっかけ”の言葉を零してしまう珍しい2  
人も普通の道端で歩いていた。――目指す先に存ずる改方学園の方  
へと向かうためだけに…。

目的地である改方学園に着く。

それと同時に運び入れた足を止める。

通学路よりもざわざわとした空気が周りに漂う。

既に卒業生の人々は『そこ』で待っていた。

「なんや。やけに騒がしいなあ…」

「そりゃあそうやろ。もう三年生は改方学園とお別れやかさ…。

最後の思い出だから：改方学園で楽しんでいるんやと思うよ」

「だからってなんでこんなにも騒がしいんや? 喧しいてかなわんわ。  
しかも、耳が痛くてかなわんわ」

平次は、あまりのざわめきにたえれなくて片目を瞑って耳を抑える。  
そして、和葉はなかなか動かない平次を引っ張る。

「アホなこと言つとらんと早よ体育館に行くで…。もう卒業式始まるんやから…」

少々声のトーンを大きくして平次に向かって騒るように呟く。

平次は小声で

「じゃあないなあ…」

とめんどくさそうにして和葉よりも歩を速めて先に進む。そして、体育館へと向かう。

「平次、ちょっと…」

手を差し伸ばし追いかけるように体育館まで小走りする。後ろのポニーテールの髪が走っている時の”揺れ”で大きく靡く。僅かな風が身を包む。

そんな中追いかけていた。

和葉は、距離をおかれないように必死になって学校の体育館まで歩を速める。

僅かな汗を無視してひたすらに向かう。

「平次、ちょっと…」

少々怒った表情を作って体育館まで急ぐ。

だんだん遠退いていく平次を和葉は追い掛けていった。

——卒業式はまだ始まらない。

## （後書き）

お久しぶりです。此処に久しぶりに来ました。HPの更新も度々行っています。季節外れで申し訳ございません。ずいぶん前の駄文ですが読んで下さってありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4136c/>

---

平和の春

2011年1月23日14時45分発行